

| | |
|-------------|---|
| 氏 名 | 中村 優子 |
| 学 位 の 種 類 | 博士（異文化コミュニケーション学） |
| 報 告 番 号 | 甲第407号 |
| 学位授与年月日 | 2015年3月31日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当 |
| 学 位 論 文 題 目 | 〈積極的消極空間〉再考 —視覚表象における〈異常〉とコミュニケーション— |
| 審 査 委 員 | (主査) 野田 研一 平賀 正子 前田 英樹（本学大学院現代心理学研究科教授） |

I. 論文の内容の要旨

〈積極的消極空間〉再考—視覚表象における〈異常〉とコミュニケーション—
目次・本文・注・参考文献を含め、全 243 頁。

(1) 論文の構成

序章 視覚表象における〈空間〉〈不在〉、そして〈異常〉

第1章 理論的スコープ

1. 1. 基軸概念
1. 2. 空間研究の系譜と視点
1. 3. 構造分析の枠組み

第2章 〈積極的消極空間〉を問う

2. 1. Kern の定義
2. 2. 定義の問題点
2. 3. 再考の方向性

第3章 〈積極的消極空間〉への新たな視点

3. 1. パラダイム・シフト：常識からの分離
3. 2. 〈コミュニケーション〉の新展開
3. 3. 表象の革新としてのアール・ヌーヴォー

第4章 〈積極的消極空間〉の展開

4. 1. 〈非具象〉の絵画
4. 2. 広告
4. 3. マンガ

終章

参考文献

(2) 論文の内容要旨

本論文は、視覚表象において、通例、不可解さや違和感として感知される〈異常〉(M・フーコー)もしくは〈不在〉の顕現という現象を解明するに当たり、アメリカの歴史学者スティーブン・カーン(Stephen Kern)が1983年に提起した〈積極的消極空間〉(“positive negative space”)という概念を有力な手がかりとして援用しつつ、視覚表象における空間的布置の変容を芸術的〈コミュニケーション〉の契機として捉え直そうとする試みである。

〈積極的消極空間〉とは、ゲシュタルトにおける〈図と地〉という弁別の〈地〉(=消極的空間)に相当する部分が、〈図〉(=積極的空間)と同等なほど意味生

成に貢献するとされる〈空間〉表象のことである。このような〈積極的消極空間〉表象にあつては、消極空間がいわば前景化されてしまうため、一般的な視覚的空間表象の価値秩序（本論文では「ヴィジュアル・シンタクス」と呼んでいる）が、完全に転倒はしないまでも、一種のゆらぎを見せ、不安定な表象として認識される。しかし、著者はこのような視覚表象における空間的布置の変化、すなわち不安定な表象（〈異常〉もしくは〈不在〉）の顕示こそが、19 世紀末から 20 世紀を経て現在に至る空間の視覚表象におけるパラダイム・シフトともいふべき重要な現象であり、ステイーブン・カーンが看取したとおり、建築から芸術、文学にまで広く浸透している広義のモダニズムの表象と軌を一にするものとする。

本論文では、主に前半の第 1 章、第 2 章において、〈積極的消極空間〉による意味生成の理論的様相を既存の空間研究とコミュニケーション理論との照合により整理し、後半の第 3 章、第 4 章では、空間観念のパラダイム・シフトともいふべき〈積極的消極空間〉を歴史的観点から再検討し、19 世紀末のアール・ヌーヴォーのポスター画にその出発点を見いだしつつ、20 世紀の〈非具象〉絵画、そして広告、マンガといったポピュラーカルチャーに息づくものとして、豊富な具体例を挙げて検討を加える。こうした検討を通じて、〈積極的消極空間〉のある視覚表象は、意味やメッセージをどのように生み出し、作者と鑑賞者とのあいだにどのような〈コミュニケーション〉をもたらすのか、そして、その背後にある「前提」とは何かについて論じてゆく。

論文全体の結論としてのポイントは、次の 5 点である。

- 1) 人間の視覚が表象を捉える時、避けがたく参照しているものが常にあり、それは〈ヴィジュアル・シンタクス〉によって表現される「常識」といわれるものだということ。
- 2) 絵画のみならず表象は、「常識」をつくり、人々を結びつけ、社会や文化の存続を支えるある種の思想や信条、価値観、イデオロギーが反映されたものであるということ。
- 3) 〈積極的消極空間〉のみられる表象における〈異常〉の顕現は、常に「常識」を参照することを余儀なくされるため、逆に、「常識」が強く意識されるという側面を持つこと。
- 4) 〈積極的消極空間〉のある表象を作品として発表する作者には、作者自身が持っている習慣的、経験的、社会的、文化的に当然だと思っている事物や事象の連なり方、つまり彼らにとっての「常識」を、鑑賞者と共有しているという前提があるということ。その共有への信頼があるからこそ、そうした〈ヴィジュアル・シンタクス〉からの逸脱が、創造性や革新性を世に問うことが可能となること。

- 5) 〈積極的消極空間〉のみられる視覚表象は、それじたいが作者と鑑賞者間の芸術的コミュニケーションのメディアであるということ。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文のもっとも注目すべき特徴の1つは、視覚的空間表象における近・現代的推移を、空間表象における位階秩序の平準化としてとらえたスティーブン・カーンによる〈積極的消極空間〉をめぐる議論に焦点を当てた点にある。1980年代に注目を浴びたカーンの議論は、モダニズムをめぐる問題提起として多様な文脈で有効な議論として援用され続けたものの、その評判や知名度に釣り合うほど本格的な議論は行われてこなかった。本論文は、この〈積極的消極空間〉論をいわば、再定義しつつ、その理論的展性と有効性を改めて問いかけている。第2の特徴は、この〈積極的消極空間〉論をコミュニケーション論として、とりわけ広義の芸術的コミュニケーション論として位置づけるという新たな視点を提起した点にある。この場合、〈積極的消極空間〉が既存の秩序感覚にもたらず〈異常〉が、前提として埋め込まれている〈ヴィジュアル・シンタクス〉を意識化させることにより、逆説的にコミュニケーションを発動させるというメカニズムを指摘している。第3に、以上の2点から成る視覚的空間表象をめぐる問題提起を検証するに当たって、豊富な事例を引証している点にある。広告、アールヌーヴォーのポスター、非具象絵画、シュールリアリズム絵画、そしてマンガにいたる多様な事例を挙げ、そこに通底している〈積極的消極空間〉の存在を浮上させるその手順は著者の情熱をよく示しており、またその着眼は独創的である。第4点目として挙げられるのは、ヴィジュアル・シンタクスという概念の採用である。これは「空間構成上の視覚的な事物・事象の連なり」(p. 16)を指すとされるが、このような視覚的空間表象の価値秩序(これを著者は時に応じて「前提」「常識」「コード」「規範」とも呼んでいる)を、たんなる価値観としてではなく、具体的な構造を示す概念として明示化したことは、今後の研究に大きく資するものである。

(2) 論文の評価

本論文は、ミッシェル・フーコーのいう〈異常〉の顕現、とくに空間表象における〈異常〉や「論理的整合性の不在」による、一見するとディスコミュニケーションとも意味の欠如・不在ともいえる表出形態の提示を、スティーブン・カーンが提起した〈積極的消極空間〉をめぐる議論と深く連繫するものとして把握し、それを一旦、空間研究における代表的な先行研究による議論(造形心理学系、空間機能論系、空間社会学系、表象記号論系)と照合しつつ理論的整理を行い、〈積極的消極空間〉という概念の理論的意義と(タイトルに示されて

いるとおり) その「再考」を進めるものである。

審査委員による評価のポイントは以下のような点にある。

1) カーンの〈積極的消極空間〉への着目

視覚的空間表象における〈異常〉や〈不在〉、〈欠如〉や〈論理的不整合〉の問題についてどのような解を与えるかは、もちろん多様でありうるが、ステイブン・カーンの〈積極的消極空間〉論との接続は注目すべきものがある。なぜなら、カーンの議論そのものが最近ではやや「常識」と化したきらいがあり、それゆえに正面切った議論が少なくなっていたがゆえに、現時点での再評価、再定義は重要な意味をもつ。また、このような空間表象論が、たんなる観念的な布置や価値づけのシステムではなく、具体的な配置関係の問題でもあるがゆえに、いっそう、〈積極的消極空間〉論再考は大きな意味をもつ。

2) 〈積極的消極空間〉がコミュニケーションを生成するという視点

視覚的空間表象における〈異常〉や〈不在〉、〈欠如〉や〈論理的不整合〉がコミュニケーションを断ち切るのではなく、むしろコミュニケーション(=意味)を生成するという視点は、ヴィジュアル・シンタクスによっていわば惰性化している認識や経験の世界を賦活するという論点は、そのモデル化とともに重要な意義を有する。

3) 美術史・表象史的な視点

本論文は、〈積極的消極空間〉の概念を再検討すると同時に、このような問題におけるいわば表象史を一部提示している。それが 19 世紀末のアール・ヌーヴォーのポスターに始まり、〈非具象〉絵画を経て、20 世紀の広告やマンガの表象世界へと展開される歴史的な視点である。もちろん、厳密な美術史を志向している論文ではなく、いわば美術史をたぶんに意識した「観念史」的性格を持つ研究であるがゆえに、美術史としての限界はあると思われるが、逆にこのような志向でなければ開き得なかった局面、とくにアール・ヌーボーから 20 世紀の広告、そしてマンガへと繋がるポピュラーカルチャーの系譜を取り出すことが可能となっている。

4) 関連する諸概念への周到なリサーチ

本論文は、〈積極的消極空間〉を問い直す前記 1) ～ 3) の理論的作業に当たり、「基軸概念」をより正確に把握・理解するために、第 1 章に「理論的スコープ」を配し、空間、積極的消極空間、視覚表象、ヴィジュアル・シンタクス、非具象、不在/異常、コミュニケーション、構図、図と地、空間/場所、イデオロギー、モダニズム、記号論などなど、関連する多彩なタームとその意味について丁寧な解説を加えつつ理論的に噛み合わせる努力が為されている。

以上の点から、本論文はきわめて水準の高い研究の成果として、審査委員会

としては高く評価できると判断する。なお、審査委員会では、以下のような問題点が提起され、議論されたことも併せて付記しておく。

- 1) 論文全体の構成が抽象から具体へと進むために、論文の読みやすさという点からいえば、逆であったほうがよかったのではないか。ただ、学術論文としての特性から、かならずしも読みやすさのみに重点を置くことは現実的には不可能であっただろう。
- 2) 〈積極的消極空間〉論を再考するに当たって、多様な視点を複合させなければならぬのは当然ながら、たとえば地理学における場所論から、芸術論における異化の問題までが同時的に焦点化されるのは、やや総花的で散漫な印象を与え、その分、論述が薄くなる危惧がある。ただ、やはり学術論文としては、可能な限りディフェンドするための視点は必要であるし、そのような点を分厚くしてゆく努力は、今後の課題として位置づけることもできるだろう。